

小学校 生活

「わたしの町はっけん」の学習において、
気付きの質を高める繰り返しの学習活動の在り方
—地域の人々と関わる活動や気付いたことを絵や文で表す活動を通して—

風間浦村立下風呂小学校 教諭 橋本 賢吾

要 旨

本研究は、第2学年「わたしの町はっけん」の学習において、「わたしたちの町には、こんないいところがあってこんないい人がいるんだ」と気付きそのことを表現できる児童を目指し、地域の人々と関わったり場所を訪ねたりする体験活動と、気付いたことを絵や文で表現し交流させる活動を繰り返すことの有効性を明らかにしたものである。

キーワード：小学校 生活 気付き 体験活動 表現活動 繰り返し

I 主題設定の理由

平成20年1月に中央教育審議会が示した「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」（以下、答申）には、生活科の改善の基本方針として「人や社会、自然とかかわる活動を充実し、自分自身についての理解などを深めるよう改善を図る。」「気付きの質を高め、活動や体験を一層充実するための学習活動を重視する。」「安全教育を充実することや自然の素晴らしさ、生命の尊さを実感する学習活動を充実する。」と提言されている。これを受け、「見付ける、比べる、たとえるなどの多様な学習活動の充実に配慮することや「活動や体験したことを言葉や絵で表す表現活動を一層重視する」ことなどが改善の具体的事項として示された。ここから、人・社会・自然と関わる体験活動の重視と気付きの質を高める学習活動の実践、安全・自然・生命に関わる学習活動の充実が生活科の授業改善の方向性と捉えることができる。

これを踏まえて自身のこれまでの授業実践を振り返ると、学習が単発的な体験活動だけで終わり、児童自らの考えの変化に気付かせたり、児童相互に気付きのよさを見付けたり、比べさせたりといった交流を十分行ってこなかった。そのため個人の気付きが全体に広まったり、それによって新たな気付きを生じさせたりといったことができていなかった。

そこで、本研究では、児童が「わたしの町はっけん」の学習を通して、地域で生活したり働いたりしている人と関わり合う体験活動や気付いたことを絵や文で表す表現活動を繰り返すことによって、地域のよさや地域の人への親しみに気付かせたいと考え、主題を設定した。

II 研究目標

児童が地域のよさに気付き、地域に愛着をもてるようにするためには、地域で生活したり働いたりしている人と継続的に関わる体験活動が有効であること、及び体験後の児童自らの気付きを、絵や文で繰り返し表したり交流したりする活動が有効であることを実践を通して明らかにする。

III 研究仮説

「わたしの町はっけん」の学習において、次の手だてをとることによって、地域のよさに気付いたり地域に愛着をもてるようになっていたりという気付きの質の高まりが期待できるのではないかと。

○地域で生活したり、働いたりしている人と継続的に関わるために、繰り返し地域を訪れる体験活動を行う。

○気付きを絵や文で繰り返し表したり、振り返らせたりする表現・交流活動を行う。

IV 研究の実際とその考察

1 研究における基本的な考え方

(1) 「気付きの質の高まり」について

ア 「気付く」「気付き」について

小学校学習指導要領と指導要録の分析を通して生活科の「気付き」の概念を考察した朝倉（2004）によると「生活科において「気付く」とは、子どもが具体的な活動や体験，思考や話し合いなどの学習活動によって対象に出会い，自らの内面に，何らかの事実，関係，疑問，感情，感覚などを生起させ，子ども自身がそれを意識し自覚することである。そして，生活科における「気付き」とは，そのように意識され自覚された事実，関係，疑問，感情，感覚などである」と概念規定している。ここでいう「自らの内面」とは自分の心や自分自身のこと，「意識し自覚する」とは認識と捉えることができる。また，小学校指導要領解説生活科編（以下，解説）の中にも「気付きは，対象に対する一人一人の認識であり，児童の主体的な活動によって生まれるものである。そこには知的な側面だけではなく，情意的な側面も含まれる」とある。

以上のことから，生活科における「気付き」とは，具体的な活動や体験を通して得た自分なりの認識と捉えることができる。

イ 「気付きの質の高まりについて」

上記アの「気付く」「気付き」の概念規定から，「気付きの質の高まり」とは，児童の内面化された無自覚の部分が自覚されていく過程であると言える。

朝倉（2004）によると，「気付きの質の高まり」とは，まだ明確でない何かに思い当たる「低次の気付き」から意識化・自覚化される程度持続的な「気付き」，更にその「気付き」が認識へ向かう過程であるとしている。

清水（2008）の報告例では，気付きの質の高まりを「感覚的な気付きが比較や関連付けを行った発見的な気付き，そして理由づけや因果関係を示した思考的な気付き，そして再認識の気付きへと変容すること」と示している。

須本（2011）が執筆した『気付きの質を高める生活科指導法』では，生活科における気付きの質の違いに触れ，図1の「気付きの階層」を示している。I層は，「なぜ」や「どうして」などに対応する質の転換に迫る認識が芽生える層。II層は，追究のための活動や思考を経た気付きであり，自分自身では気付いていなくても，クラスの意見交流から気付くことも多い層。III層は，活動を通じた対象との出会いで感じたことや素朴に思った気付きなど多様な気付きが存在している層。「かわいい」や「あったかい」という情意的な気付きもこの層に位置付けることができる。「気付き」が図1のIII層からII層へ，II層からI層へと変化することが気付きの質の高まりであるとしている。

解説には「無自覚のものから自覚された気付きへ，一つ一つの気付きから関連付けられた気付きへと質的に高まっていく」とある。

以上の気付きの質の高まりに関する定義付けと，柳澤（2009）が示した「気付きの質の高まり」に関して整理した表を参考にまとめたものが図2である。気付きの質の段階として，まず，個々の気付きとして無自覚のものが自覚される。個々の気付きとは，児童一人一人がもっている一つ一つの気付きである。無自覚のものが自覚されたとしても，その自覚された気付きは，まだ個々の気付きの域である。朝倉の「低次の気付き」，清水の「感覚的な気付き」，須本のIII層「素朴な気付き」である。その域を「感覚的な気付き」とし，表情，言動，記述等に現れた「感情・感覚」を，その要素とする。例えば「聞く」「さわる」「見る」「かぐ」といった行動から生じる気付きや「おもしろい」「あったかい」「へえ」「あまい」といった単純な感情的な気付きである。

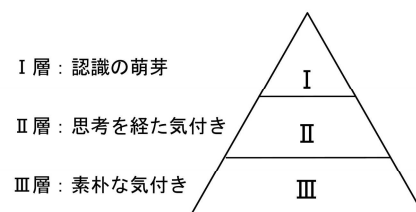


図1 気付きの階層

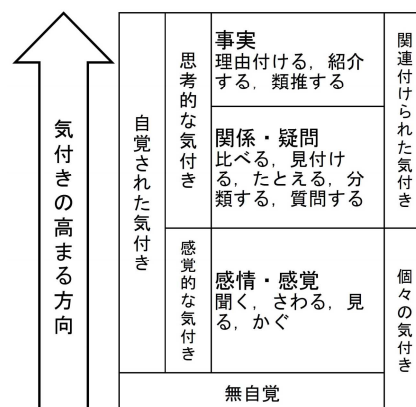


図2 気付きの質の段階

次に個々の「感覚的な気付き」が、朝倉の意識化・自覚化されたある程度持続的な「気付き」、清水の「比較や関連付けを行った発見的な気付き」、須本のⅡ層「思考を経た気付き」に高まる。その域を「思考的な気付き」として捉える。これは、「比べる」「見付ける」「たとえる」「分類する」といった活動から生じる気付きであり、複数の気付きから、その関係を捉えたり、疑問を表したりしている内容となる。

関係を捉えたり、疑問を表したりしている気付きは、更に「理由付ける」「紹介する」「類推する」といった思考・活動を通して、より深い事実認識としての気付きへ高まっていく。朝倉の「気付きが認識となること」、清水の「理由づけや因果関係を示した思考的な気付き」、須本のⅠ層「認識が芽生える層」である。これら「関係・疑問」を示した気付き、及び「事実」を認識できた気付きは解説にある「関連付けられた気付き」と捉えることができる。

(2) 気付きの質を高める手だて

本單元では、「めざせ！下風呂のガイドさん」という学習課題を設定し、そこから児童の自発的な活動を促す学習を展開する。この学習課題を設定することによって、児童に生活経験の中で余り意識していなかった地域のことを調べる必要感が生まれ、児童の興味・関心が單元を通して保たれると考えられる。また、常にこの課題に戻って思考させることにより試行錯誤しながら活動できると考えられる。

まず單元のはじめに、今まで児童が生活経験の中で接してきた地域や人に目を向けさせる表現活動を行う。次にそれらを実際に確かめるための体験活動を行う。その中で獲得された「へえ」「見た」等の個々の気付きから、「ガイドさん」は地域のことをよく知っていなければならないという思考が生まれる。そして、個々の気付きが「なぜ」「どのくらい」「ちがいは」という疑問や関係を示す関連付けられた気付きに高まる。更にそれらの関連付けられた気付きを解決するために実際にその場所を訪れたり、人に接したりする体験活動を行う。その後、ガイドするための資料を整理したり、案内文を考えたりする表現活動を繰り返すことによって更に関連付けられ、「～だから」「このくらい」「～だ」という事実の認識として気付きの質が高まっていく。最後に学習課題達成のために地域を案内する活動を通して、「わたしたちの町には、こんないいところがあって、いい人がいるんだ」と表現できる児童へ近づくことができると考えた。

そこで、本單元における主な表現活動と体験活動の展開とそれに伴う気付きの高まりを示したのが図3である。表現活動－体験活動－表現活動…という繰り返しの活動を行っていく際、児童が得た気付きの交流を、それぞれの活動の中に意図的に位置付けることで新しい気付きや関連付けられた気付きが生まれ、次の自発的活動への意欲付けにもつながっていくと考えられる。

以上を整理すると、下に示すア、イの手だてとなる。その結果を検証していくことを通して「気付きの質の高まり」について児童の姿を捉えていく。

ア 人に接したり、場所を訪れたりする体験活動の繰り返し

児童は、ふだん、地域の人や場所に何度となく接したり、訪れたりしている。本單元では「めざせ！下風呂のガイドさん」という課題を設定し、「大すきをたしかめよう」「もっとしらべよう」「町をあんないしよう」といった毎回違う目的意識をもたせる工夫をした体験活動を行う。

イ 表現・交流活動の繰り返し

体験活動時の児童の気付きについて、絵や図、文に表現させる。そして、児童相互に発表したり、質問し合ったりという交流の場面を設けることで、児童がもっていた曖昧な気付きが明確になったり、自他の考えから新しい疑問や更に深く調べてみたいことを自覚したりするなど、児童の思考的な気付きを生む活動を繰り返していく。

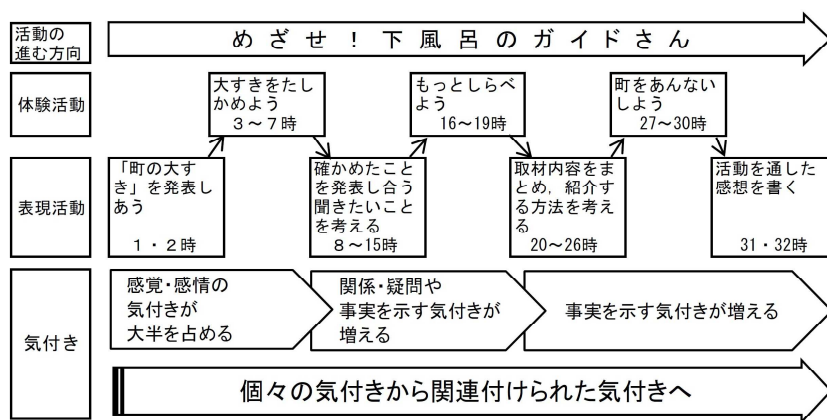


図3 単元における活動と気付きの高まり

2 検証授業について

(1) 単元名 「わたしの町はっけん」

(2) 単元の流れ (全32時間)

図3参照

(3) 気付きの要素の抽出と気付きの質の高まりについて

児童の発言や記述、絵から気付きの質の高まりをどのように捉えていくか示したものが表1及び表2である。表の右側には基準とする表現を示した。発言や記述の場合は、「事実」「関係・疑問」「感情・感覚」の要素で捉え、絵の場合は「事実」「関係・疑問」を一つにまとめて「関連付けられた気付き」として捉える。これは絵の場合、明確な分類ができないと考えたからである。

(4) 検証方法

以下の児童の表現を基に検証を行う。

- ・表現活動を行う場面での発言や記述、絵
- ・体験活動中や交流の場面での児童の発言や記述

表1 気付きの段階(発言・記述)

段階	発言・記述
事実	～である。～いた。 ～だ。…だから～だ。等
関係 疑問	分けると、…より～、 違う、～みたい、等
感情 感覚	「おー」等の感覚的な声、 あつい、さむい、ざらざら、 赤色、見た。等

表2 気付きの段階(絵)

段階	絵
関連付けられた気付き	個々の気付きの内容が組み合わせられ表現されたもの
個々の気付き	単体りんご1こ等

3 仮説の検証と考察

(1) 繰り返し地域を訪れる体験活動を行う

5～7時には「大すきをたしかめよう」という見学を行った。1・2時で気付いたことを確かめることを目的として7名を4名(A児, B児, C児, E児)と3名(D児, F児, G児)の二班に分けて活動した。そのときのVTRの様子から4名の班の児童の主な発言を見学場所ごとに表3のように、「気付きの質の段階」に当てはめてみた。この結果からも分かるように、誰と又は何と関わったかによって気付きの数が違う。地域の人との関わりからは、「ホテルニュー下風呂」の29個から「いかをさばいている人に出会う」の12個まで高い数値を示している。このことから地域の人との関わり

表3 5～7時の児童の気付きの場面とその段階

見学場所	気付きの段階												合計	関わり
	感情・感覚				関係・疑問				事実					
	A児	B児	C児	E児	A児	B児	C児	E児	A児	B児	C児	E児		
移動中	1	1	1	1	1	0	0	0	2	1	1	1	10	教師
いかをさばいている人に出会う	1	2	1	1	1	0	0	0	1	1	2	2	12	地域の人
公衆浴場「新湯」	2	3	2	2	1	0	0	0	1	1	1	1	14	地域の人
つばた旅館の女将さんに話を聞く	2	1	2	2	2	1	2	1	1	2	3	1	20	地域の人
B児の家 ○○民宿前	0	0	0	0	1	0	0	0	2	2	2	2	9	教師
公民館(休憩)	0	0	0	0	2	0	0	0	1	2	1	2	8	場所
ふれあいロード	0	1	1	2	1	1	2	1	2	2	2	2	17	教師
足湯	1	1	1	1	1	0	1	0	1	1	1	2	11	場所
ホテルニュー下風呂	1	2	2	1	3	3	6	2	2	2	3	2	29	地域の人
肉屋	1	1	1	2	1	0	1	0	2	2	1	2	14	地域の人
小計	9	12	11	12	14	5	12	4	15	16	17	17	144	
合計	44				35				65					

の有効性が分かる。

また、A児, B児, C児, E児について、1・2時の絵で表現させた気付きの数と5～7時の見学での気付きの数を比較したものが表4である。個々の気付きの合計は1・2時の方が多く、76個認められたが、関連付けられた気付きの合計は5～7時の体験活動の方が圧倒的に多く、100個も認められている。気付きの質の高まりから見ると体験活動の有効性が明らかである。

これらのことから、体験活動での地域の人との関わり合いが気付きを生み、気付きの質も高まると言える。

16～19時に2回目の「もっとしらべよう」の体験活動を行った。1回目とは違い「めざせ！下風呂のガイドさん」のために自分が説明する人や場所について詳しく調べてくるという目的意識をもった上での活

表4 1・2時と5～7時の気付きの比較

気付き	個々の気付き		関連付けられた気付き		
	個々の気付き	感情・感覚	関連付けられた気付き	関係・疑問	事実
活動	1・2時 絵の表現	5～7時 体験活動	1・2時 絵の表現	5～7時 体験活動	5～7時 体験活動
A児	19	9	3	14	15
B児	23	12	4	5	16
C児	20	11	3	12	17
E児	14	12	4	4	17
小計				35	65
合計	76	44	14	100	

動であった。この体験活動を行うことにより、児童がもっていた疑問の段階にあった気づきを解決することができた。

20～26時に案内文を作り、案内の練習を教室で行った。その後、児童が案内する対象である校長と一緒に「町をあんないしよう」の体験活動を行った。そのときの質問に受け答える児童の様子から気づきを抽出したものが表5である。F児の抽出例では、新たな疑問に対して知っている児童が答えたり、A児、F児の抽出例から全員で疑問を共有し、新たな気づきを生み出したりしている。気づきを交流する場面を意図的に設けることによって新たな気づきやより質の高い気づきを生み出すことができた。

(2) 気づきを絵や文で繰り返し表したり、振り返らせたりする表現・交流活動

8～13時に「大すきをたしかめよう」の体験活動で得られた気づきを交流するために、聞いてきたことを児童全員で発表し合う活動を行った。そして、1・2時の表現活動でのカードの絵と8～13時の表現活動でのカードの絵に表現された気づきを比較した。

図4、図5から気づきの変容が見て取れる。C児は1・2時のカードに二つのホテルを絵で表現した。この二つのホテルは温泉街の中で特に大きな建物である。それが1回目の体験活動を経た後のカードに、その二つの建物のうちの一つである「ホテルニュー下風呂」での見学を通して認識したことを描いている。カードには「ぞうりがにきなのがしりました(原文ママ)」という記述、そして草履の絵が見られる。これはホテルを見学した際に、若女将が子どもたちにお土産のことを話し、そのことがC児の印象に残ったことの現れと言える。

E児は、1・2時のカードには「つぼたりよかん」の建物だけを描いていた。それが1回目の体験活動の後には、聞き取ってきたことをカードに記すことができるようになった。このことから、個別の気づきとしてあったものを実際に確かめることを通して、それぞれの気づきが関連付けられたことが分かる。

これらのことから、単元の導入時の「無自覚な個々の気づき」が体験活動や表現・交流活動を経て「自覚された個々の気づき」に、更に「関連付けられた気づき」へと高められていったことが分かった。

(3) 児童の感想

31時の児童の感想が表6である。本単元の目標とする児童像「わたしたちの町には、こんないいところがあって、いい人がいるんだ」と気づき、表現できる児童に近付けたかどうかについて考察していく。

A児は金森商店の店主のやさしさや地域の生活を支えている商店のよさに気づき、ガイドに近付いたことを実感し、自分の成長を記述している。B児は町のガイドとしてしっかりと説明できたことやうれしさについて自分の成長を記述している。C児は案内できたこと、その結果、喜んでもらえてうれしかったこと、初めて知ったことを記述している。そして、自分の成長を意識できている。D児は自分の成長について触れて、できるようになったこと、初めて知ったことを記述している。E児は当日欠席したが、案内して説明しなかったことを記述している。F児はたくさん知ったことや校長先生に2回ほめられたことに対するうれしさが記述されている。G児は校長先生に教えたこと、お父さんが説明してくれたことへの感謝が記されている。

表5 質問の受け答えに現れていた気づき

見学場所	気づき																					
	感情・感覚							関係・疑問							事実							
	A	B	C	D	E	F	G	A	B	C	D	E	F	G	A	B	C	D	E	F	G	
VTRからの抽出	2	1	1	2	1	2	2	1	1	1	2	1	1	2	1	2	1	1	1	1	1	1
A児の抽出例	個別の気づき							気づき														
F児の抽出例	<p>①「下北カルタはこの1枚だけなんですか？」 →むつにも電車をのるところにあります。 「下風呂はこれだけなんですか？」 →はい、 「下風呂は2つあるみたいだよ」 →どこなんだろう、ちかくにあるみたいだ、ほんとうだここに2まいある。 「調べておいてください」 →はい、しらべておきます。</p> <p>②「公園を掃除にだれが来るんですか？」 →ちょっとわかりません →D児「女の人が掃除にきているのを見かけたことがあります。だれかはちょっとわかりません」</p> <p>③「いかすみせんべいとこの白いいかせんべいではどちらがおいしいんですか？」 →どちらもいかなのでどっちもおいしいです。</p>																					

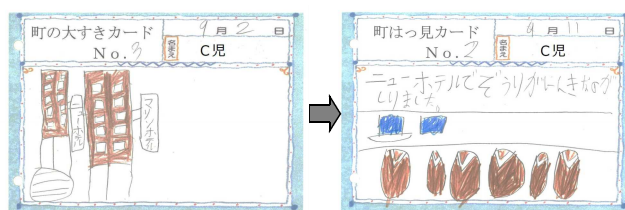


図4 カードに現れている気づきの変容 (C児)

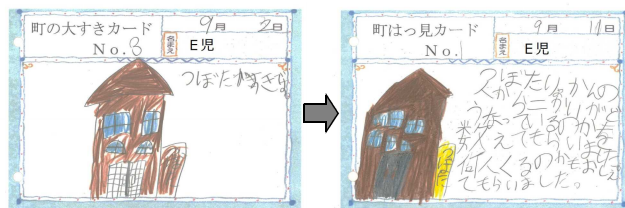


図5 カードに現れている気づきの変容 (E児)

以上のように、今回の生活科単元「わたしの町はっけん」の目標達成については、全員が十分満足のいく達成状況であった。これらのことから、表現活動、体験活動、表現活動と活動を繰り返すことによって、気付きの質が高まってきたことが分かる。また、人やものに対する気付きだけでなく、自分自身への気付きも児童の感想からうかがうことができた。

V 研究のまとめ

- ・児童に体験の目的意識を明確にもたせることや、地域の人々と関わり合う活動を繰り返すことによって、新たな個別の気付きや関連付けられた気付きが生まれる。
- ・体験したことを絵や図、文に表現させることや、表現活動や体験活動の過程に児童の気付きを交流させる場面を設けることによって、個別の気付きや関連付けられた気付きが生まれる。また、それらの気付きは次の体験活動や表現活動で更に関連付けられていく。
- ・児童の感想からは、児童の「自分への気付き」を捉えることができた。つまり、児童が表現活動と体験活動を繰り返すことによって自分の成長に気付くことができる。

VI 本研究における課題

- ・児童から出てきた気付きを分類し意味付けする評価規準の妥当性を高めることが課題として残った。前もって想定される気付きを段階や場面ごとに具体的に設定することで解決するのではないか。
- ・個々の児童の気付きの質がそれぞれ異なるため、児童の気付きから次の活動を促す支援の時期・方法が難しい。個々の学びの状況を把握した的確な支援が必要なのではないか。

<引用文献>

- 1 中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」、p. 92
- 2 朝倉淳 2004 「生活科における「気付き」の概念についての基礎的研究」『日本教科教育学会誌 第26巻 第4号』、p. 65
- 3 文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説 生活科編』、p. 4
- 4 清水一豊 2008 『小学校新学習指導要領の展開生活編』、p. 30, 明治図書
- 5 原田信之・須本良夫・友田靖雄 2011 『気付きの質を高める生活科指導法』、p. 25, 東洋館出版社

<参考文献>

- 清水一豊 2008 『小学校新学習指導要領の展開生活編』 明治図書
 原田信之 須本良夫 友田靖雄 2011 『気付きの質を高める生活科指導法』 東洋館出版社
 文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説 生活科編』
 柳澤麻里 2009 『気付きの質を高める生活科学習指導の在り方』 広島県立教育センター研究紀要第36号

表6 児童の感想

児童	主な感想
A	<ul style="list-style-type: none"> ・ガイドさんにけっこうちかついたと思いました。(自分への気付き) ・ほくは、はじめておとなの人に自分がつたえたいことかいいたいことをいえました。(自分への気付き) ・あんないできませんでした。(自分への気付き) ・いかすみせんべいをあじみできた。ありがとうございました。(地域のよさ) ・金森の人もやさしい人だし、むつとかに行かなくてもすぐにフルーツとかおかしとかジュースがかえる。(地域のよさ、愛着) ・バスもまちがわずにのれました。(自分への気付き)
B	<ul style="list-style-type: none"> ・いかすみせんべいがおいしかった。(地域のよさ) ・はじめておとな人にはなしができました。(自分への気付き) ・あんなましつかからないでせつめいすることができました。(自分への気付き) ・校長先生にほめられてうれしかった。(自分への気付き)
C	<ul style="list-style-type: none"> ・校長先生をあんないしてよこんでもらえてうれしかった。(自分への気付き) ・いかすみせんべいを食べたらおいしかった。(地域のよさ) ・下風呂のかかるたのことを初めて知りました。また、なぜあるのかはじめて知りました。(愛着) ・バスののりかたもまちがわずにのれました。(自分への気付き)
D	<ul style="list-style-type: none"> ・まえまでいろいろせつめいできなかったのができるようになった。(自分への気付き) ・いかすみせんべいがおいしかった。(地域のよさ) ・金森商店が80年やっていることをはじめて知りました。(愛着) ・いさりびこうえんにおちていた木のみをもちかえりました。
E	<ul style="list-style-type: none"> ・けっせきして校長先生をあんないすることができませんでした。 ・校長先生におしえたかったのは、公園になぜ丸太みたいなものがあるかということです。(愛着) ・なぜハウスみたいなものがあるかです。(愛着) ・またきかいがあったらこうちようせんせいにおしえたいです。(自分への気付き)
F	<ul style="list-style-type: none"> ・いかすみせんべいというものをたべました。食べたらあまくておいしかったです。(地域のよさ) ・校長先生に2回もいいところをいってもらってうれしかったです。(自分への気付き) ・なぜいさりび公園をしらべてみようと思ったのかということが行ったことがあまりなかったからです。(愛着)
G	<ul style="list-style-type: none"> ・いかすみせんべいをたべてうれしかった。(地域のよさ) ・ホテルニューのことを校長先生におしえました。(自分への気付き) ・お父さんがせつめいにきてくれた。